

『カレドニアの陽気なミューズたち』 の諸版について

櫻 井 雅 人

1 はじめに

その編纂にロバート・バーンズが少なからぬ貢献をしたと言われる『カレドニアの陽気なミューズたち』は、いまだに評価が確定されていないようである。この中にバーンズの春歌のすべてが収められているのではないし、すべてがバーンズの手になるものでもない。中身もさまざまな歌が渾然として集められているだけの代物であり、バーンズ研究者からすれば、死後何者かによって編集されたものであってバーンズの作品集とはみなせないし、むしろ自筆稿本や手紙などに残されている版のほうがはるかに重要であろう。また、ヴィクトリア朝に成立した民俗学が春歌を扱いたがらないのもっともなこともかもしれない¹⁾。春歌を含まない民謡集は、まず編集されたものと考えられるのだが²⁾、船乗りとかカウボーイのような男性のみの集団でも「婦女子向き」のロマンティックな歌だけが歌われていたとしたら、それこそ異常である。むしろ猥雑なものは民謡ではないという認識でさえないわけではない。セシル・シャープは下品で下卑た歌について「さいわいなことに沢山はないし」「大部分は個人的に作ったものであって共同体のものではない」と的外れなことを言っている³⁾。もしも民謡の特質のなかで口頭伝承を重視するならば春歌こそ民謡らしい民謡であろう。そもそも『カレドニアの陽気なミューズたち』は、当初その存在さえも隠されていたくらいで⁴⁾、19世紀の諸版はまったく信頼おけるものではなかったし、20世紀になってもその半ば過ぎまでは書店の棚に並ぶという本ではなく、一般には容易に入手できない「幻の」春歌集であった。ちょうどロレンス『チャタレー夫人の恋人』とかヘン

リー・ミラー『北回帰線』などと同じ頃「解禁」されてはいるが、それでもそれらとは違って重要な文芸作品とはみなされていないし、あまり注目されないで今日に至っている。1999年に原本のファクシミリ版も出版されたので、とりあえず主だった資料はなんとか参照できることになったが、いまだにしばしば原本とは違った版を元にして論じられることがあるのを鑑みて、ここで諸版について整理することとしたい。まず、参照した諸版などを以下に一覧にして示す。数十点にものぼるすべての版を参照することはとうていできなかつたが、重要と思える版はここに含まれているだろう。

The Merry Muses of Caledonia; (Original Edition) (Printed and published under the auspices of The Burns Federation. For subscribers only. Not for sale. 1911) [以下、「マクノート版」と呼ぶ]

James Barke and Sydney Goodsir Smith, eds., *Robert Burns: The Merry Muses of Caledonia*, with a Prefatory Note and some authentic Burns Texts contributed by J. DeLancy Ferguson (New York: G.P. Putnam's Sons, 1964) [以下、「バトナム版」と呼ぶ]

James Barke and Sydney Goodsir Smith, eds., *Robert Burns: The Merry Muses of Caledonia*, with a Prefatory Note and some authentic Burns Texts contributed by L. DeLancy Ferguson (London: Panther Books, 1966) [以下、「パンサー版」と呼ぶ; また上記と合わせて「バーク版」と呼ぶ]

G. Legman, ed., *The Merry Muses of Caledonia* (collected and in part written by Robert Burns) (New Hyde Park, New York: University Books, 1965) [以下、「レグマン版」と呼ぶ]

The Merry Muses of Caledonia (University of South Carolina Press for the Thomas Cooper Library, 1999) [以下、「ファクシミリ版」と呼ぶ]

また、次の2点は『カレドニアの陽気なミュージズたち』そのものではないが、関連が深いので必要に応じて参照した。

John S. Farmer, ed., *Merry Songs and Ballads; Prior to the year A.D. 1800*, 5

vols. (Privately printed for subscribers only, 1895-1897; rpt. Cooper Square Publishers, 1964, with Introduction by G. Legman)

James Kinsley, ed., *The Poems and Songs of Robert Burns*, 3 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1968)

2 原本とファーマーの春歌集

周知のごとく、バーンズが『カレドニアの陽気なミュージズたち』を出版したのではない。バーンズは1796年に若くしてこの世を去り、この本が密かに印刷されたのは数年後のことである。印刷本としては長いあいだ原本は一部しか知られていなかった(手書きの「写本」はあるが)。はじめはバーンズ学者のスコット・ダグラス (Scott Douglas) が持っていたものであちこちに彼の書き込みがなされており、後にローズベリ卿 (Lord Rosebery) 所蔵になった(「ローズベリ本」と呼ぶことにする; 現在はスコットランドのナショナル・ライブラリーにある)。その標題紙は上部と下部とが切り取られていて、書名の定冠詞と下部の年号がなかったために、正確な出版年が不明であった(一般には1800年「頃」と考えられていた)。しかし1965年にG・ロス・ロイ (G. Ross Roy) によって完全な版(これより「ファクシミリ版」が作られた)が発見され、標題紙(扉)の「全容」が明らかになった。そこにははっきりと「1799年」と印刷されていたのである。参考のために標題紙の文言を写しておく。

THE / MERRY / MUSES / OF / CALEDONIA; / A COLLECTION OF /
FAVOURITE SCOTS SONGS, / Ancient and Modern; / SELECTED FOR
USE OF THE / CROCHALLAN FENCIBLES.

.....
Say, Puritan, can it be wrong, / To dress plain truth in witty song? /
What honest Nature says, we should do; /What every lady does,—or
would do.
.....

PRINTED IN THE YEAR / 1779

目次や序文はなく、巻末の索引（5ページ）を含めて127ページの小型の本である。収録数は87編（2編の異版を勘定に入れないと85編）で、歌詞のみであって楽譜はなく、注などもない。題名のすぐ下に曲名が記載されているものが多いが、曲名がないものは「替え歌」ではないとの意に解される。活字はロング・エスを使用しており、索引にはいくつかの不一致がある（本文の summer を simmer とするなど）。最終ページの下部に印刷者の名があったようであるがファクシミリ版原本では削り取られていて判読できない⁵⁾。クロカラン・フェンシブルズ (Crochallan Fencibles) とはバーンズもメンバーであったエディンバラのクラブ（男性のみの社交クラブ）の名であり、ここで紹介・歌唱されたものを編集したと推測される。この歌集そのものの最終的な編者は不明であるが、やはりこのメンバーであってバーンズのエディンバラ版『スコットランド方言詩集』を印刷したウィリアム・スマイリー (William Smellie) が出版あるいは編集に何らかの形で関わっているようである。なお、『カレドニアの陽気なミュージズたち』という書名はバーンズによるものではないと考えられている。

バーンズ自身が記録に残している春歌と『カレドニアの陽気なミュージズたち』所収の諸版とはあちこちに違いがある。もちろん『スコットランド音楽博物館』(Scots Musical Museum) 所収の版はさらに相違が大きい。『カレドニアの陽気なミュージズたち』と称する本は19世紀に幾種類かの版が出ているが元の形を留めているものは皆無であるという。収録の歌も原本とは違っているし、題名も The Merry Muses と短縮されていたり、「1827年版」と称するものは実際には「1872年版」であったりしている。約半数の歌謡はどの版にも収録されていない⁶⁾。

少なくともオリジナルの写し（写本と言ってもよい）を参照して編纂されたのは1895年に予約者のみを対象として出版・頒布された「私家版」のジョン・ファーマー編『陽気な歌とバラッド』である。ファーマーは、大規模なスラング辞典 (Slang and Its Analogue) の編者としても知られる人物である（当時進行

中の「品位ある」OEDには収録されない語彙を集めており、パートリッジの辞典が出るまではこの種の参考図書としては唯一のものであった。当初は第1巻のみの予定であったようだが、1897年までに5巻が出された。『カレドニアの陽気なミュージズたち』からの歌はそれぞれの巻の終わり近くにあり、第1巻には13編が原本の順序で収められている。最終的には原著のおおよそ8割を含むことになったが、全編ではないし、各巻に無秩序に分散している。さらに「孫引き」版であったためか、スコット・ダグラスの書き込みが入り込んでいるものもある。それゆえ、元の姿を正確に伝えているとはとうてい言えない。なお、わずかではあるが語句などに編者の注が加えられている。ちょうど同じ頃没後100年を記念するヘンリーとヘンダースン共編の『バーンズ詩集』(*The Poetry of Robert Burns* (Centenary Edition), edited by W. E. Henley and T. F. Henderson, 1896-97)が刊行中であり、そこには『カレドニアの陽気なミュージズたち』からの歌謡は収録されていないが、ヘンリーは『スラング辞典』の共編者でもあり二人は親交があった。たとえてみれば、『バーンズ詩集』に対しては、OEDに対する『スラング辞典』のような位置にあるといえよう⁷⁾。バーンズ詩集に『カレドニアの陽気なミュージズたち』を含まないという伝統は、それ以前からも、またその後の出版にも引き継がれていく。かなり長いあいだ教科書としても利用されてきたロバートソン編『バーンズ詩集』⁸⁾は「完全版 (to be complete)」であって「全部を収めた (the text is presented entire)」と称しているが、やはり同様の扱いである。

3 マクノート版

原本にかなり近い形で出版されたのは、初版を除けば1911年のマクノート版が初めてである。これはバーンズ学者のダンカン・マクノート (Duncan McNaught) が本格的に取り組んだ校訂版 (critical edition) であって、タイトルは *The Merry Muses of Caledonia; (Original Edition)* として、わざわざ「原典版」との文言が加えられている。背革装の本で、背文字は MERRY MUSES / BURNS VINDICATED であり、標題紙の下部には次の文言が書き加

えられている。出版社 (Kilmarnock: D. Brown & Co. である) の名は書かれていない。

A VINDICATION OF ROBERT BURNS / IN CONNECTION WITH THE ABOVE PUBLICATION / AND / THE SPURIOUS EDITIONS WHICH SUCCEEDED IT. / PRINTED AND PUBLISHED UNDER THE AUSPICES OF THE / BURNS FEDERATION. / FOR SUBSCRIBERS ONLY. NOT FOR SALE. / 1911

ガーション・レグマンによると、「100部限定」であって、後(1930年)にフィラデルフィアで出版された海賊版(750部限定と言われる)はいくつかのアメリカの大学図書館には所蔵されているがこの底本のほうは「はるかに稀な(far more rare)」版である⁹⁾。これはバーンズ協会の後援の下に出されたバーンズの名譽を回復するための出版物(vindication)であり、とりあえず「マクノート版」と言っておくが、編者の名前はどこにもなく、25ページにわたる緒論(Introductory and Corrective)はVINDEKX(擁護者の意であろう)との仮名を使って書かれている。匿名とはいえ、緒論などには、マクノートがすでに自ら長らく編集していた『バーンズ・クロニクル(Burns Chronicle)』(バーンズ協会の年刊)の中で論じてきた内容をかなり取り入れたものであって、知る人が見ればマクノートが筆者であることは一目瞭然であるし、マクノート自身が『バーンズ・クロニクル』(vol. III, 1911)の中でこの「限定版」が予約出版されることを予告している、という¹⁰⁾。それまで出回っていた諸版の内容がいいかげんであって、中には著者がバーンズとされているものもあることから、バーンズ研究者たちに内輪で配布するための決定版を目指したものと理解されよう。

マクノートがローズベリ版そのものを見ているのは明らかだとされる。それは、収録の順序が原本にほぼ従っているし、ダグラスの書き込みを取り込んで入りからである。注だけではなく、たとえば“Ellibanks”(p. 58)にはダグラスのマニュスクリプト版をさらに付け加えている。しかし、それでもテキスト部分でさ

え同一とは言い難い。「原典」とはいえ、うち3編が収録されていない。“Cud-die the Cooper”がないのは“The Cooper o' Cuddy”（これはある）と混同したためかもしれない。“Mill, Mill—O (original set)”は注で言及しているが、意図的に削除された（不要との判断であると思われる）。また、これは誤りから来ているのであろうが、“There's Hair On't”の位置（p. 107）に類似した題の“Nae Hair On't”が置かれていて“There's Hair On't”が未収録である。

かなり多く（約20編）の題名が変更されていることにも注意すべきである。“My Auntie Jean”のように単に題名を加えたの（もとは題名が付いていなかった）もあるが、たとえば、“I Rede You Beware o' the Ripples”は“Beware of the Ripples”に、“Supper Is Na Ready”は歌詞ともどもに“Supper Is Not Ready”となっている。もとより民謡の題名は流動的で数十もの題で知られているものもあるくらいで、より一般性の高いと思われるものに変更すること自体は何ら問題がないが、こと「原典版」と称するからには変更したことを明示して相違の対照表くらいは容易すべきであったろう。

もっともわかりにくいのはどこまでがオリジナルでどこが校訂・注釈なのかを判別できなかったり、区別しにくいことである。1799年版には曲名が添えられている程度であったが、マクノートはさらにかんりの注を加えている。曲名も新たに添えられたものもあるが（たとえば、“Tail Todle”には“Tune— Charlie's muster roll”と）、もともと示されていたものと表記上は同じように書かれていて区別できない。もう一方、“Here's His Health in Water”は“Tune— [In Johnson's] Scots songs, vol. V, page 494”とあったが（このように出典やページが示されているのはこれのみである）、マクノート版では“Tune— “The job o' journey wark”となっている。曲名が削除されているものもある（“Had I the Wyte She Bade Me”には“Tune—Highland Hills”とあった）。

マクノートは編集過程でフェーマー編『陽気な歌とバラッド』の存在に気が付かなかったようであるが、出版間際になって知ったようで、そこに含まれていたバーンズ作と称する“The Court of Equity; or, The Libel Summons”を巻末（Appendix）に「真偽（authenticity）」のほどを確定できる手がかりがないと

の注記（およびかなり詳しい注釈）を沿えて付け加えた（アメリカの海賊版からこの詩は削られている、という）。これは春歌ではなく、機知に富んだ戯れ歌であり、今ではキンズリー版詩集にも収録されている。

このように、それまでのバーンズ研究を集成してある意味ではまともな編集版が初めて作られたのであるが、何分にも「秘密出版物」に近い存在であって、広く知られることなく約半世紀が過ぎていく。しかし、この本そのものは人目にさらされなくとも、そこで論じられたことは引き継がれてきた、とするならば、出版の意図は十分に生かされてきたと言えよう。もちろん、それまで「出版」されてきた怪しげな『陽気なミュージズたち』に取って代わる校訂版を作ることが目標であったが、あくまでもバーンズ研究者の立場からなされた仕事であって、標題紙および編者名（仮名）からすると、バーンズのオリジナルな作品はそこには含まれていないことを「立証」して「潔白」を明らかにするのが、大きな目的であったと思われる（ただし、“The Patriarch”とか“The Summer Morn”のように「バーンズ作」とのお墨付きが付けられたものがある）。これまでバーンズを高く評価してきた中産階級の道徳観に相反するような『カレドニアの陽気なミュージズたち』の存在をいかに扱うかは、バーンズの問題ではなくて、自分たちの問題であった。これは熱意のこもった緒論によく表れている。

論点はいくつかあるが、「スコットランドの国民詩人」たるバーンズの目的と関わりについてはおおよ次のようなものである。バーンズは、いずれ書き直すことになる「浄化された（purified）」版の素材として自分用のために春歌を集めたのであって、もともと出版するつもりもなかった。それ以前の記録がないといってバーンズの作ということはできない。こんな汚らわしい作品群をバーンズのような偉大な詩人が書いたとは考えられないし、彼自身も自分が集めた春歌コレクションについて「私自身の手になるものはほんの少しである（A very few of them are my own.）」とジョン・マクマードー（John M'Murdo）への私信（1792年2月付）で述べている、と。

この手紙の一節は緒論でも2度にわたって引き合いに出されており、もともとは1800年にジェームズ・カーリー（James Currie）が編集した最初のバーンズ全

詩集に引用されたもので、100年以上もの間、バーンズは春歌を書いていないという主張の重要な状況証拠とみなされてきた。もっとも、少しは書いたとも読めるが、いずれにせよ、1931年に新たな書簡集が出版されて、この文言はカーリーが書き加えたものであることが判明する。完全な形では1985年の書簡集に初めて収録され、ファクシミリ版付属のロス・ロイのブックレットにテキストと写真版がある。

4 バーク版

正確には「バーク=スミス=ファーガソン版」と呼ぶべきであろうが、筆頭編者の名前を借りておく。1959年にエディンバラで会員のみを対象（“For private distribution to members of the Auk Society only”）としてM・マクドナルド社（M. Macdonald）から出版されたものである。すでに名のとあったバーンズ学者たちが編者としてつらねており、頒布先は限定されていたとはいえ、公に出された最初の版とされる。とくに、1964年にアメリカのパトナム社（G.P. Putnam's Sons）からは一般書として出版されて誰でも入手できるようになった。翌年にはイギリスのアレン社（W.H. Allen）からも出ており、そして他の出版社版やペーパーバックにもなって「駅の書店でも売られた」という（なお、パンサー版ペーパーバックはパトナム版とはページ番号が異なる）。書名には Robert Burns: The Merry Muses of Caledonia とバーンズの名が編者として「堂々と」書かれている。パトナム版ジャケットの副題は“A collection of bawdy folksongs, ancient and modern”であって、1799年版の標題紙とは違っている（パンサー版表紙は“A collection of bawdy folksongs”のみ；いずれの標題紙にもこの副題は添えられていない）¹¹⁾。

元になったのは同じくローズベリ版であり、標題紙とスコット・ダグラスの書き込みのあるページの写真が添えられている（パンサー版にこれらの写真はない）。入手しやすいこと、および信頼置ける編集であることなどから、この版は広く参照されてきた。しかし、問題がないわけではない。書名は『カレドニアの陽気なミュージズたち』であっても1799年版とは非常に異なっている。このことは

序文や解説でも十分に述べられて入るが、まったく新しい方針の下で編集された『新版・カレドニアの陽気なミュージズたち』と称するほうが正確であろう。

まず原本とはまったく違う順序でバーンズとの関わりに応じて分類がなされているし、テキストも1799年版からが中心とはいえ、自筆稿本からのもの（これらは『陽気なミュージズたち』とは違っている）を多く取り入れ、それとともに原本にない歌謡を20編（うち8編は他の刊本から）近く追加している。「1827年版」（実際は1872年出版）からも4編が「復活」した。また、すでに他のバーンズ詩集に収録されている11編は含まれていない。つまり、バーンズとの関係を中心に据えて編集したものであって、原本の再現は意図していないのである。したがって、歌の題名なども原本とは違っているものがある（“For A' That And A' That”は『陽気なミュージズたち』からではあるが“Put Butter in my Donald's Brose”と変更されている；変更されていることは注に書いてあるが）。分類は、自筆稿本から（バーンズ作、バーンズ収集）、印刷物から（『陽気なミュージズたち』以外を先に並べている）、バーンズが品位ある版（polite version）を書くのに利用した元の古い歌謡、バーンズの収集した歌謡となっている。さらに、本によって扱いが異なり、後から出たパンサー版では6編が分類を変えている。以上のような大きな相違があるにもかかわらず、『カレドニアの陽気なミュージズたち』に含まれている歌謡とかヴァージョンと言った場合、1799年版からではなくて1964年版（あるいは59年版）であることを見かけることがある。パーク版の“Green Grow the Rashes”はマニュスクリプトからのもので、折り返し以外は原本とはまったく違った歌詞である（原本に添えられた“older edition”一マクノートは“older version”と言い直している—に近いが）。もちろん『スコットランド音楽博物館』版とも違う。パーク版はマクノート版よりも（また、ファーナー編『陽気な歌とバラッド』よりも、と言ってもよい）はるかに原本とはかけ離れた編集・内容となっているのである。なお、これにも巻末に“Libel Summons”（＝“The Court of Equity”）が収録されている。

キンズリー編バーンズ詩集はこの延長線上にある。つまり、当然のことではあるがバーンズが関係したとみなされる作品のみを収録したもので、自筆稿本など

が存在する場合にはつとめてそれを採用し、必然的に『カレドニアの陽気なミュージズたち』からの収録は少なくなっている（といっても、かなりあるが）。また、これまでの刊本詩集にない楽譜がついていることは特筆しておくべきであろうし（ただし、楽譜付きそのこと自体は新機軸ではない）、詳しい注釈も決定版にふさわしい内容となっている。つまりこれは画期的な（あるいは革新的な）詩集である。

オックスフォード・スタンダード・オーサーズ版詩集¹²⁾は、1904年のロバートソン版に変わるものとして企画されたもので、3巻本からその詳しい注釈を削除して編集されており（楽譜・年譜・参考文献・グロッサリーはついている）、注はほとんどなく出典も明示されていない。『カレドニアの陽気なミュージズたち』からの作品も取り込んだ詩集という謳い文句がふさわしいところであるが、序文や参考文献にその書名が見当たらないのも不思議なことである（自筆稿本に残されている作品も含めた、とは言っているが）。おそらくはそれまでのバーズ詩集の形式を見かけでは踏襲しつつ、実質において新しいバーズ詩集を作り上げたのであろう。

5 レグマン版

以上のように、『カレドニアの陽気なミュージズたち』は、その名が広まっていくにもかかわらず、一向に元の姿が明らかにされてこなかった。これを再現する試みは1965年のレグマン版が初めてであり、原本およびそのファクシミリ版以外で正確に内容を知るには未だにこれしか頼れるものがない。レグマン版は詳しい緒論と注釈とを加えて、本文はローズベリ版をそっくり（ページも元のままに）写し取ったものである。さらに補遺としてカニングム稿本¹³⁾からの6編を追加している。相違は活字（ほぼ類似の活字を用いてはいるが、原本のロング・エスは使われていない）と索引である（カニングム稿本の歌謡の索引はこれとは別に作って分離している）。索引は、誤記もそのまま残してあるが、順序を完全なアルファベット順にするなど原本とは違うところがある（また、原本にはあった“*As I cam(e) o're the Cairney mount*”がこの索引から落ちている）。

レグマンの目的はただ原本を提示するだけに留まってはいない。ほとんど無視されてきた春歌をまともな研究対象とするためにも、バーンズが深く関わっていたことを論じるためにも、信頼置けるエディションを編集することが不可欠との立場をとっているようである。序文では、バーンズの関わり方（バーンズの人となりを知るのに重要な手紙（1788年3月3日付けのエイズリー書簡¹⁴⁾）がいずれの書簡集にも収録されていない、ということも含めて）およびこれまでの諸版が論じられている。マクノートがバーンズの「潔白」を示すために『カレドニアの陽気なミュージズたち』の編集をおこなったのとは違って、バーンズが春歌を書いていた証拠を出しながら関わりが深かったことを示している。

また、レグマン版のもう一つの大きな特徴は本文のページ数とほぼ同じスペースを割いた各歌謡についての詳しい注である。緒論と書誌とグロスアリーを加えれば本文の1.5倍の分量になる。スコット・ダグラス、ダンカン・マクノート、バークなどの注および他の諸版、さまざまな歌謡集をつぶさに検討しつつ、それらを集成しただけでなく、いくつもの新しい知見が加えられている。たとえば、“There Cam a Cadger” について、バーク版はアルダイン版詩集にある “There came a piper out o’ Fife” の元になった歌としているが、レグマンは、カニンガム稿本の記述からするとこの反対でアルダイン版の「作品」はカニンガムの偽作であって『カレドニアの陽気なミュージズたち』版こそバーンズが収集ないしは創作したものと推測する。これらの結果のいくつかはバーク版の再版に取り入れられている（そのため後から出たバーク版は分類が相違するのである）。

アラン・カニンガムとはバーンズ詩集を1834年に編集した人物で、レグマンはその稿本を発見し、紹介した。これ自体は『カレドニアの陽気なミュージズたち』の一部を成すものではないので、そこからの6編をここに並べて掲載しなくてはならないとは言えないが、関連の深さ、これまで知られていなかった歌謡（3編）があること、バーンズの手になると思われる歌謡がある（“The Bonniest Lass” は「1827年」版からバーク版に入っているが）ことなどから、すでに『ホーン・ブック』で詳しく紹介されているとはいえ、一緒に扱うことは何かと都合がよいだろう。ただし、「補遺」に入っているカニンガム稿本からの歌は、

本文からの通し番号でページが打ってありしかも同じ活字で組んでいるので、一見するとこれらもともと『カレドニアの陽気なミュージズたち』に入っていたかのような印象を与えかねないのが難点である。なお、“The Court of Equity”は収録されていない。

6 ファクシミリ版

たった一部しかないと思われていた刊本がもう一部あったということは大きな発見であった。これは1965年にエディンバラで見つけて、ロス・ロイが入手し、後にサウス・カロライナ大学のバーンズ・コレクション (Burnsiana) に収められた。ロイは自分が編集をしている『スコットランド文学研究』誌で直ちに紹介しているが¹⁵⁾、1999年に至ってようやく出版にこぎつけた。ローズベリ版とは違って書き込みのない「美本」であったためファクシミリに適していた。発見された時にはトマス・ローランドソン (Thomas Rowlandson) のエロティックな絵などを一緒にして製本されていたというが、それらは取り外されて復刻されていない。ファクシミリ版は本体のみで、ロス・ロイの解説は別冊のブックレット (20ページ) として、一緒に函に入れられている (函には書名のみが示されていて出版に関する情報は中を見なければわからない)。これまで原本の姿がゆがめられて伝えられてきたことを考えると、この方針は歓迎されるが、壊れるなどして函が失われれば別々になる可能性もある。600部の番号入り限定本であるが、2002年12月現在でも大学出版局のカタログに載っているところを見ると、どうやら各図書館がこぞって購入したという形跡はない。

7 おわりに

ここまできてようやく全体像が見えてきた。バーンズ研究の立場からすると、キンズリー編詩集のように『カレドニアの陽気なミュージズたち』に全面的に依存はしないまでも離れずに検討を進めるということになろう。もう一方の民俗学的立場といえば、レグマン版をさらに発展させてスコットランド文化の中での春歌というものを跡付けて、その中で『陽気なミュージズたち』の位置付けを考えると

いうのも一方法である。さらに独自のテキストがあるうるとしたら楽譜も加えて音楽面をも十分に記述したもので、約100年前のディック編『バーンズの歌謡』¹⁶⁾に対応するものから始めなくてはならない。いずれにしても、これで終わりではなくて、現在ようやくスタート・ラインに立ったところである。だが、日本の多くの大学図書館が『カレドニアの陽気なミュージズたち』を収蔵していないとなると¹⁷⁾、まだしばらくはこれ抜きでバーンズが講じられるのであろうか。

- 1) Francis James Child, *The English and Scottish Popular Ballads* (1882-98) とか Cecil J. Sharp の民謡集 (収集は20世紀初頭であるが編集方針からするとヴィクトリアンである) が見事なほどに春歌を排除したり書き換えたりして、あたかも存在していないかのような様相を与えていることを見るとさらにはっきりしてくる。春歌集の書誌については、G. Legman, "Erotic Folksongs and Ballads: An International Bibliography" (*Journal of American Folklore*, vol. 103, no. 410, 1990, pp. 417-501) を参照されたい。大学出版局 (すべてアメリカ) から出されたものは、春歌集というよりは研究書という体裁をとっており、それでも数は少なくてせいぜい Vance Randolph, *Roll Me in Your Arms: "Unprintable" Ozark Folksongs and Folklore, vol. I (Folksongs and Music)* (University of Arkansas Press, 1992); Guy Logsdon, *"The Whorehouse Bells Were Ringing" And Other Songs Cowboys Sing* (University of Illinois Press, 1989); Ed Cray, *The Erotic Muse: American Bawdy Songs*, 2nd ed., (University of Illinois Press, 1992) くらいなものである。
- 2) Cf. "[I]t is safe to say that no folk community in the world is without them [i.e., obscene or erotic songs]" (Kenneth S. Goldstein, "Bowdlerization and Expurgation: Academic and Folk." *Journal of American Folklore*, vol. 80, no. 318, 1967, p. 375).
- 3) Cecil J. Sharp, *English Folk Song: Some Conclusions*, 4th ed. (Methuen, 1965), pp. 127-8.
- 4) Noel Perrin, *Dr Bowdler's Legacy: A History of Expurgated Books in England and America* (Macmillan, 1969, pp. 208-212) に出版事情から見たあらましがあ
- 5) この拡大写真が G. Ross Roy, "The Merry Muses of Caledonia" (*Studies in Scottish Literature*, vol. II, no. 4, April 1965, Plate II) に掲載されている。
- 6) 詳しくは、Legman, *Merry Muses*, pp. 265-297 (Bibliography) 参照。
- 7) この点は J.W. Hales and F.J. Furnivall, *Bishop Percy's Folio Manuscript*, 3

vols. (1867-68) の場合とも似たところがある。本編3巻に収録が見送られた歌謡(春歌など)を、ファーニヴァルは *Loose and Humorous Songs* (1867) として別巻の形で編集して自ら単独で出版した。

- 8) J. Logie Robertson, ed., *The Poetical Works of Robert Burns* (Oxford University Press, 1904). これは岡倉由三郎編『バーンズ詩選』(研究社, 1923)の底本である。
- 9) G. Legman, *The Horn Book: Studies in Erotic Folklore and Bibliography* (1964; Jonathan Cape, 1970), pp. 210-11.
- 10) Legman, *Merry Muses*, p. 292.
- 11) folk song (folksong) という概念は19世紀末になってから使われ始めたもので、OED (はじめは NED) 第1版に収録されていない語であり、バーンズがこの語を知っていたとは考えられない。19世紀初頭のベートヴェン編曲の歌謡集(バーンズの歌も含まれている)も「民謡集」と題されることが多いが原題にこの語は使われていない。民謡とは実体ではなく、作り上げられたブルジョワ的概念であることは、Dave Harker, *Fakesong: The Manufacture of British 'folksong' 1700-to the Present* (Open University Press, 1985) 参照。民俗学はこのような概念をいかに打ち破るかに存続がかかっているが、一般の認識とは離れていくようになった。
- 12) James Kinsley, *Burns: Poems and Songs* (Oxford University Press, 1969). のちにペーパー版も出た。
- 13) 詳しくは Legman, *Horn Book*, pp. 131-169.
- 14) *Horn Book*, pp. 148-49.
- 15) 注5) 参照。
- 16) James C. Dick, *The Songs of Robert Burns* (1903; rpt. Folklore Associates, 1962).
- 17) WEBCAT (984の日本国内大学図書館の図書検索システム)によると、パーク版が1図書館に、ファクシミリ版が3図書館にあるとのこと。

(一橋大学経済学研究科教授)